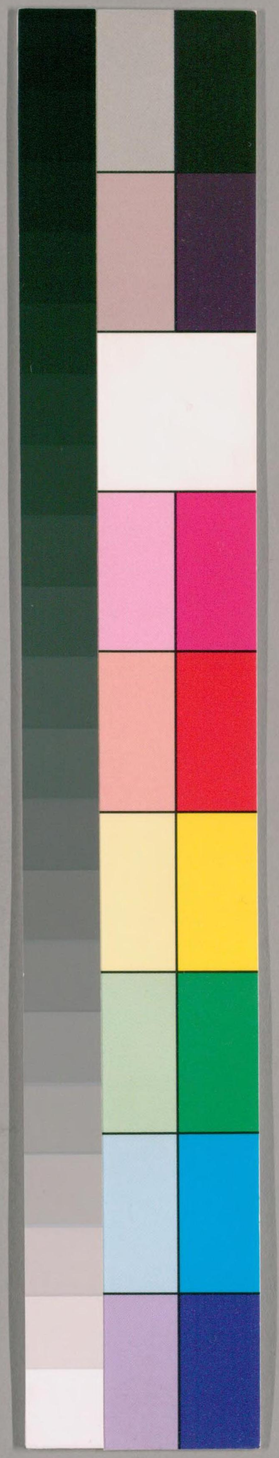


国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

858-73

世を誹諧とりてうそ
心もなきもひとうく奴婢僮僕
乃やうに
そのゆゑ甚深
津守香山ならの井よ
入倫と和し人の
序一

五坪

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

門人のこよなう二十ばかりとうるまでなりぬるも
ひとりごとを教えなどせんまでもなきことなれど
ものまねの事に最も甚しきものの如くなれば
ついでまでよりて終へと我まゝ也
道ならぬことをいひてて周章
しかる物ゝ志ゝ物ゝ

中之巻しまいまで
筆にまうせる物ゝ

次敬斎長伯誌

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

俳諧乃道いやしきにあらずといへ
ども誠にまことの初心の
ものゝ俳諧の道に深くいらんとする
もの人乃ふすまの下紐とく
今いうの俳句する人ふところ
はまくいたつら人をゆる
なるべうこれをおもふて俳諧に只尚文の
化口ふう根もたちひねもすとうとう
幸に杉風ふうまで是ぞ和尚の一辞

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

雑談てふ上手の分ない
こゝ〳〵下女のい歌ひ乃中にあるごとく
いつまでもいろ〳〵
句作ばかりすること詞をのこ
とゝ〳〵云ふ〳〵云ふ深く入
ることこのごろ古学
あまりすき〳〵探ること
ばかりうるさくなりて仕舞ふ
句い師匠乃ごとくにもてはやし

能く得ざる人ほいそのうち
ひるもくる得ざる風俗をそこ用ひまねび
ある人ほ俳諧い古くぬ物とそこいふ
おろか不真乃ぬ物と云ふいふこの事
ふるく行るやい天性教育
盡と事をして四十年
産をふも忘るゝ日時いまゝ
ありて硯をもつく寝さめ道
乃ちとこゝろ〳〵ふ事ほ聊まよ

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

平生深く仏をいのれる人の子なり物ともろ新
そのいまだこころえきこえざる
俳諧をもてる人あるはゆゑにもひとりをはそや
深くも新しき止まるあるをこころにかいるくそ待る
或時いろもなるやとたゆうよ物ゑえ又或は
ひとすうなるうそくもあるまん事業うるも
方あくく深くへたん人いまの程くれ功つもて
物もろうきるすを覚待もん俳句の道よ深う
あるそれいろうく止まる奥もあらく只臨泊

の多きまくれ俳句をもて人くみそ
い連句の達人まく集ひて
いくて祇をもりれ上りい
五年の功十とぬなるうつ
有りへき事ふこそ
新しく仏りる向いやうそぬるくなるへく只とて
しなくとなくもあるこれ又あるれ
こそ結るといひ初るくや作意ものこのそ
まそつるとはて仏深く楽しく一句去

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

すべて詞のいろいろの差別ちるべし

歳旦の題ども只春ある句ども元日や
とよくいふべし元日のみならずの句
ならばくるまも松かざり花の匂ひ其のことも
月の句ならばくるまも意味深くもなる
ようにいふべし人ある句ならば
ちるさまはうをく色くの事ありとも
おもしろきものなるべし
いつくろを塗るそはこれのごとくちる

をいふべし集ばかりいふべからず
これこれ又はこれこれ句ちるべし
扨り此道を修行せんと
ならば人の虚実のさ
かひ力をつくし爭ひ出すべし白毎にいつも
おもしろくそのはちるまじくいふべし
是なん常の心得ちるべし世のあれを
深く執するな放すべし
いかにも俳諧は事なき日の
茶菓子ぞと思ふべし森草に刻付して再び返

まくらはいとうれいる教ゑ
ゐりて盛い朝飯後よりけ
越く終る又畫巻てあるま
きくくと吟るる程てみらる今時の俳諧い
再返とくまつと事ま秩ちうれい先の上
り為教い井りく終れて滿る而いつ人の庵片
三分の一てもそくし古人い各沉思してむ
毎り宗匠のい松うくい又教えるを
取事なり物い為るまよ不便をくくのは

のとなるく松尊一て楽し
はるく間のうけるくなる
作意とつの立る為い
物りるくやおりえ終ん又物りるくの
やまいなるくそ雅く得るく人の逃去れ為
雅約えれ人の耳まは物
かくうえ志るの詞やと
えくいき而ちもやおまいれ
笑えるとつる楽をと不首尾の義別

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

俳諧は古今集序の六人のさ
是もそも未だそのくわしくろ
詞をあらそひ後ろいの何の事ともし
なるを作れて作者の初一会の趣向をさ
それ俳諧称い我乃も雅乃ゆ
もろもろもろ股つて又逸
会をもて其意味のわりろさ
なるべし
俳諧乃俳諧真乃そこいろ
在り著くい各其日乃神主なるを設乃
又清新乃めらる席なのろう勧請
やて在ろくさ作くむ人いや
出まるべしや
追善懐舊乃俳諧も古てそ
これも仲の道ろそむき作

花の白い一座の宗匠ま
ざ〳〵この外うち沢貴人小人なるまい者を
不審〳〵はくを品々仕うまつる小宗匠のてま
をはさまして外よりも會釋をこまごまとしたわし
むつかしい句者の外をも
より仕習ひいる作者い都鄙ある人をも
とくなをさ〳〵ちかけうまさるをおぼえ
ず

発句第三なと〳〵ら
うる物の末を知りそ作者いそれのうるせ
脈句文字なりそとも第二
留をみ〳〵いなるかとも仕
皆ちる事うして仕まつと何故〳〵いう定ちること
いと無き所以をちかく又紹句のて
ふと留第二の文字留をれや留ちる〳〵事
もあるまゝ仕る

表の十三句めを月の座裏そい十一句め月

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

十三句め紅花の花と急ぎ付まて又月前恋
又雨あまそそぐ折ふし何句めにてもよし
さつきの月花の座には何句めにても
いとまをとらへ舞へもとめ入句目に付る
花の櫻花とつゝき正花とうけ
鎌倉の右大将西行上人と
その後ひとり附馬の大江の千里と月見の
ことまでいつれも及ばざるところは何をもつて
花といひまん中に深く尋ね入るをもつて

杜そのれ句ふおやめの句みてそれいなる紙そ
嬬こそのうて待まと余いなそ人多考へ
心とそれうまれつきたる人も俳諧そいへ
うなものこひなこうらなる実体なるも
異形と盡きる人おかし俳諧といふ物いつなる
事をおもこはおもはうて深く学ひんなる
なく口うち出るふまりをくらもそもなる
ことにいうろく変おもしろい郷この道を
そろ教まくおろ私するとなる人、俳諧そいふこと

うそはこそて世うり変ふへうくうう
うまれし多世うり変るる人の衣服も興さる
程乃模様をうる或いまさ羽織袴のよに甲る
立烏帽子なんこ紙着して人中へ出てい
へこそや能く考ふる人ら秋俳諧い和奇のこと
それいの紙様こて万のこのこのもてもを用う
ろそも鬼神をも哀れわらを猫こそのもの如をも
なるこもる道こうそ向こ俳諧紙作て西こ
乃道を行ふいおさけるる人まる特紙もる

あるは不孝不忠の人も不のこ
只世の変るまで作りもの不孝句にて
く社句にて取る松にて孝子
句と服もあるものもあるものなり
道にあるとうなる沙もの
人ことにまて常にの朝を句に
諸なるこて年へまでる人
ら紀事あるこる
古風もの今にて南風
まよりて新古の
俊ての道を約まん人の句
新古の差別いあり只その道に深く
ひなん人のまに社なるこそ
俳諧のる道にひる人
お句にの松にて美
句松にて作をまるは古

き句も又いにる古風にて
ひこと南風にの松作をまん古風
まよりて新古の差別いあれて惟
俊ての道を約まん人の句の
新古の差別いあり只その道に深く
ひなん人のまに社なるこそ
俳諧のる道にひる人
お句にの松にて美
句松にて作をまるは古

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用

あきらかならん人の句にかゝるを一様
なるに拙吟の俳諧なくてかなう所
てまた多く飽事なるべし未練の人よ此
こゝろをもてまことの句作者の粋吟の句い
一篇一こゝろをもてまことの句作者の粋吟の句い
まだ飽出ずしてはなはだよろしからず
つゝしんや人の閑事をやめよりて求る句い
いかでかよからんのみ
此道を修行せん人々いつの時代の句作
つゝてきうをもていたくくれるすゝめ
いかでかよからんまことの句作
句い数文いかでかよからんまことの句作
まこと有もあうき事よいかでかよからん
く井もいれて句のこゝろ其時のうまれ次第

やとゐるを見てゐたりしを非
なるまでかくなれ覚ゆる人ぞ
こゝ集いあつ〳〵
鶯いうぐひすと蛙いかはづとは
くの音ねなれうらやめる人
のこゝろをも明らめ
給へ

俳諧の猴行もたゝゐのこゝろ高く止まる
者いと多くいまそかりの上のかりて四方山

なる人〳〵と道理いあつ〳〵と我と非
いつる仏法にて我もそのふ風流
あつ〳〵其所まゝんとそこのそろうてひろ
〳〵階をのぼりてうそう高きをあれ
へさ仕理つゐまくまゝ入りて来練の人い
ひうすう猴行をまさるをあを
未熟ふしてひまこそ熟〳〵ふる人を
おろかみそ給へ猴〳〵得ぬ覚もなくて上ぬた

あやまりをきゝ俳諧の雅俗といふ事
をもしらぬ人の常用一
ならくおもふべきにもあらねど又智恵才覚
なりそを道とも
俳諧の雅俗といふ事
味ひを稽古して平生人と交るすべ
うのまゝに用ひくいつゝうちたるをもつて
心得ちがひをいつまでも
我い俳諧(カイ)を仕習(シナラ)ひくよりつゝ
し指(シヌ)をかくてう秩をのぞ

人いの得遠ひも俳諧の道にうとき
ひて句のうへをのみいひそやすきいたりを
そや俳諧は地自句吾句指外にて俳
地といふ事のわりうきまぬ
して兼句にて作者の
はそれのまゝを俳
なりうるべし遠句い其

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

さんとう又いもうと妻前句にて付ける
をもつてくに住をのけ給ひて
つゐにうん格外といふ事を
前句に付ける句也
外十七と古人のいひはあれども句の数を
具てくにうりをよこいふ百韻皆
住をもつて一様なる附合ばかり
のかなうへ
連俳の句体いをくにうりを
附て資を合ると云ふくにうりを
つまり行人の一歩一歩にまる附
ぬまん人ありれと末へ行んあるへ
ちらいる所ありりをいふ名のあるへ
排言り住ようにうん句い一歩
人のさをれ住ひを湯ふ
茶やとうふ一歩さこゆ所い連言うれる

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

句も仏さす而連歌のいとめでたきるい全
く俳諧なるへし一こと称名念仏尊合をする人の東
西へ行よふにうたふへきやあるは又連哥よりも
まさる詞つきをとりて俳諧ちかくいふ多ふ
ゝ有へき事にそ侍るとく其一句ならん
ふ論をとゝめいふ一聚まもりひらけ事か
ならく

俳諧の連哥を元として連哥と言ふへし
古人の詞りゝとゝめりし

時ふれ句よりふれ句の事共ありさりし人の俳言うちに
ついてなのうちいりくゝ作を盛い文字を教そ
つゝきくいとのゝ時ふれ句ちかきちかふ覚侍るかおち
ついかなる人ゝきれ多人いかさりちる人の喧哗し
ふ時其ゝ場されふ勇士ふり仰られと座言に
死へき場てもなく兵人の怒るへき様を作る
されいれあるへき場をとゝめいて無ほるすふ
なふふ事ゝ又場てふ句深く打入てとゝめ
詞柔和ふり仕立ふ句なりとゝれも

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用

詞をるを仕立ん句作事
ゐ井ゐへてゐ俳言をく
ゐいゐの趣いゐ結ゐ人ゐれ
宗長法師乃雑誌ゐ付句い
ゐゐしゐる我ゐゐか
ゐゐへゐしゐてゐゐ
ゐれゐゐゐ越の秋ゐみ
ゐ絶ゐ事なし甚ゐくに
の紙捻ゐい蓮のゐゐ切ゐ
語をゐ人寄合をまねゐ

ゐゐゐと俳諧ゐれ
事にゐて
いゐいゐいの書ゐあゐゐ
発句を書付く探ゐ人ゐゐ
向長点ゐけゐ句ゐ小短冊ゐ
くゐゐゐしを今い初心乃作者ゐ
此句を入るしゐくをして書付
又奥乃俳諧ゐ一順を向い
付句を二句はして宗匠乃

詠草に古今の付句を作者の名ひ
してきらひはをへうるものへよう
書なくまゐらせ給ひおくまゐらせ
物うれしうれしく給ひ
ひふみへの名所なる物をとりて付る句古今
松江の翁と梅花義と題
ちよろ見よの迫きもも遠し吉野山

ちよの一筆句ノ
腰ゝくる紙さけ
と付給ひしれい吉野山よ
まて師のうちめよありうら
先古筆句とへとる句おもしろ紙
ゆうあいうの作付よとひ
給ふ事ふ事ふ
作り人ふ却ふふしと
くう

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

元禄十七年の春きたりしの
ひとりごと 二

いはしの彼古風をうしなはず
をもて秋の人の注意より世俗さ
りつゝはりかゝるしまりなき作者ゝの
いふへをもつて秋の注解なる事を仕
つゝもちゐて或いは今新しと称する仕
古ゝるしまりなき句も古来のいはくしある句
古ゝるしまりなき事をも無へきをそ
只句のすゝきいふやうにうはつりあるとも
古格をもつてそれの意ゝ

をのぼりは外の仕さいあまりき事ゝ
俳諧
引秋うら八歳ゝ成ゝ比ゝいるけちる景色し
そゝくより十三歳ゝ比松江維舟ゝ師ゝ
ちるこゝもしてうの意ゝ古風をまなひ
此道ゝ名をいはく不朽ゝ
ゝもうのはゝ古老ゝ
ゝ
かくて十六歳ゝはより梅翁主人の風流や

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

うみ　ふるほりて　又　其　高風を
のつま　ぬもとゆりて　又　ふる　あまり　文字　ふるに
或は　寓言　或は　異称　さまざまに
発句　付句　ふるよる　人　おほく
ふも　おりろうまゆ　ふるに　あらず
しまも　又　ふるろを　ふくもるまちなく
しほる　覚もなくて　あふと　ふれる　て　皆へ
ゆうい　ふくふくと　ひとすじ　我　ゆうふるを　起
ぶふくへふるの　俳諧　いふれ　詞ふくろふ　一句
よろこ　ぶくいでうみて　或は　色　形かふる　乃こ
して　幻法しはふくふるを　ふくふ
詞ふ　巧ふなく　姿ふ　色形　かたち　次第
さふふくふふ　なふて　ふも　其心深しい
みへふる　俳諧乃　発句を　ふふ
青柳のまゆ　おく　岩乃　ふふしい　哉
ほん丸ふ　出　秋ふ　ふふ　春日かれ
うはふいふ　ふゆふゆふのふ
山伏ふ　ふふ　ふれふん　柳

まことの法門と聞えし一向
宗小本も紅葉しれるから唐う
ちうかの宗祇法師乃説し非道教道
非正道進正道といふ
御諚い壮句作意ふ
一隅こそ
ものやわんと延寶九年乃秋
ふ知ずて物ぐるひ心ぞうむ事
なく真享二年の春彼
の外ふ御諚ふ
おもひのうをしふろうのかうろ色品々
一句乃たくみも
皆ふふくなる
祇しゐふ人乃物ふうをはして未熟乃
人ふもいて我ふる新ふいひ
ひほうのふふ信しゐ
ふ
ふくふ及ふ道いひふ祇行しゐ
べふ他念ふ

さしてゐ口先とりて上こ人ゝ
おもひ秋んこゝ松このみさゝそあさま
ゝ秋
高砂のてやと俳諧の中に此句何
と語をかゝる松茸句い何と
あ秋い今時分るをさゝるとかゝる
かゝゝをかゝる高風いあるゝん
なゝいふ人なゝもあるけゝ
ゝくゝそかゝま

いゝゝへ談林風仔丹風なゝ
さはゝく異ゝ報をはくゝさゝ
句松ゝるゝ事るく或い文ゝ松けゝゝく
おまゝる句も仔秋と二句落ゝ捨をゝ
はとゝいゝゝなゝゝ
いゝゝへい一度石韻ゝ俳諧をゝ句毎ゝ
覚て或い帰ゝまく人ゝおゝ或い悪ゝ書
留なんとゝかゝゝ今高風なゝい
奇仙ゝ句松ゝ井かゝゝ人なゝゝ秋を

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

れかりいふくい縁語をはたらかして付られ
一句くせもい出をはれかりえ付りく今の歌
句ゟ縁語をたこゝ仕詮ちゝまと歌えて作
つゝゝれ句ゝて付をい何ゝ
き程もあゝゝゝゝ茶句ゝ
なゝゝ

祝儀の発句いうのおゝゝゝ
のゝ句のゝゝゝ柄をゝ
句いをゝいゝき詞ゝ付ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

同季を多付いよゝとのゝゝゝ
正月の句ゝ三月の物をゝく付る作者
六月の物をゝく付る作者ゝ付ゝ
ゝゝ付をゝゝゝて時節相違
き事専一なゝゝ

忘の詞をゝゝゝ忘の句ゝ
本情をれ句ゝゝ関え付る類ゝ忘いう
をく付ゝゝ心の深ゝゝゝゝ
付をゝはあゝゝ俳諧の発句ゝく

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

りこそくさぐさありて此頃仕侍りつゝ
てひろてこれ歌侍んろ

鶯いまく鄙ぶいまもち侍る
うのから四季折くの草木生数て多
まくひろくうの物くをそろくし
く所詮を弁へまるまく句をとり
へまきりてかろうろのをとんを作ろて
鄙ぶりのひな梅つまをそろくし
うひな多あるれなむ

そろそんこそて第一の事なる人も秋
春の月いこれろむるより膳ろて物そ
めまきき

夏の月い灯をそくもく詠め深し
秋の月い窓り新き海小川野辺ろ
冬ろ月いこむりの雪の雨こそ
照していそろ

春の面い物こまるく淋し
夕立い氣晴く涼し

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

五月雨の降くらすころ
好乃雨いこゑより淋し
冬の雨いとゞふさひし
未練乃人ハ排諧いまゝの
一時ハ雨おり出ていとゞ秋さひのこ仕
替侘んといふこゝろをも

やしき立うち敷竹ゝ葉去
乃引乃ゝ折比鳥の妻や花やうゑ残る村
ゝ鏡立ゑ姉ゝおろもりうち
散ゐる家くゝかんなく
ゝもくれもまつをいかゝ立ゑ人乃仕業を
うらまれてこゝふさひうと
二日三日まくい者の牛鳥乃通ひてて
うらくうおゐ庭をうゑふ
ゑうらう祢ゝをなんとしく

この歌

梅が枝の雪氷乃如くふりつもれ
まつとふれつゝ一輪乃
こゝろ花入ニ
挿ちらし
雪氷をそゝぎて
あるいのち
やさし

家咲ハ
うつの
きん実
ハ
誰人のまつ
ら
ん
ま
に
ま
ま

春乃雪
うくらをいと
うこゝろ
ハ
ハ
ハ

なんうそあるは夜もを野てく
多の梅りはこ寝覚そてそ称
梅いえともち私風情てもあり水う
むう秋風りきこうい多志のも音をく夏か
笠ちこして体こ人を雲い秋い一葉の
水うううくく風りあ冬いきくれう
わりろく雪ちあ深し
櫻い神花より人り名もう
くれくこく秋寒かして暖も

花うこ本り梢くもうい
久あともうんと契うを重し
てしうくして主も来こ
はくと世り方様をえうま
そのそもけうるしあうは法
うくれり主さく若葉り
一様うす桜い百美り
人り風雅り中立ます
桃の花い桜よりよく肥多ふ
ろやうなう

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

梨子のもいひそふ面白し
ほし藤と此其外名代
ところ古き詞をひろひ
ひろ文ども上てちりひろ
俳る人の我心まゝ道ある
ひろ〳〵ろき所へ入をし其感より出
裏面いその意味て集りや
ひろん
郭公ひろ〳〵人のそ
比より草〳〵に毎日出
て春おもきやうな
卯月朔日の櫃くさ
ようもうろ氣もひ
それ〳〵新上海の
ひろ〳〵
郭公のはい雅もそれ空
てわひ秋雨ちそ
物如〳〵ひり後のひろ人や

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

うばらそこれいはうまくの
さいのもろきもそそそそそ
觀念の奥ふもろいは埋まる佛性法身
忘心の泥をも出ろへ
涼い岡阿弥堂華頂山門四條乳の茶い
仏教くさいうえそそ田舎い櫟たんとの下
ふ意寝もろ姿ともそ
杜之朝いこのそそそ雲のすまし木草は
まる風のもれもきのそ
七夕の日い雨もそく起て雲
この集をたくあるは古今を吟して文
ふ名紙起ろいまそ糸竹をふろ酒ふ
きつれ毎ふ遊ていあとれるんるを神む
桐乃葉いやとくれからてなる
もの木ともやふ有ろそそ日比
霞つふ窓あるも晴やふそ

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

萩のしたゆく世のてうさまを
よけさうな人とも仲さもよく紙れてをは
ちかわるる夕をこゝて此花のをもて
萩のしたゆくまい野をまけくさ
さゝれ人のをこりみくさい露しも風を
物ともいてゝ有ま身をおもふ花をみれやゆて
あんこゝろさの風情てそのしらいちかれの
しろれをとる人のまれなるうこゝろ
ゐる

萩いもりうち風うちろうろ
名あり

薄い色くの花りて古草の中にひとを
立てかうち行くろうをかしてこゝろさゝれた
人うの風情を活しのあん人うの風情を
孔かと只うの人の程くゝれえゆうちうし
えの笠面もあて行うん人の晴雨まり
いのうの程もちうとういもん道のうろ
さいかくまい入ちんこそのうち秋

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用

親の為ものうう付添ふしあるはかりをもの
ことなくくに出ることかけてもおもう故
はることなれい雅ももてしたる人ふうそ
ちうて我ことく人ふ倍りなるやをもて
なんとふるいもふ参詣そてみ物ーのるい
身もをーさけうたる女の常帷子たてみる
ーてそうふ人ふ井ふをふ出い雨もありやうなる日雛の
くの物あふる着ふく物あふ紙たり月の長い

ふるかこを開り夜い為ふ
野そふ風ふをのまくふ
死ねへーふ笑ふねく林ふ
ふうなはく祢んふて夜も更ふ行
沉ふて何ふふうふは
おふる

紅葉り吐いきのふり雨ふ指紙
井ふいふふ人あとお何ふをを
空ふあふれいふい井晴ふ林ふ葉を雫

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

さそらふ月日こそ風情そて名ことう
うふいしき秋遠う遠しふ秋のそらの雲れ
かよいなる森乃姿さへ名ふうそれて其里人の
月代さ遠しくん夜くの寝覚と神しあう生
名ふうそてほ心のあるまふ秋新嫁しか
ふうそめるせそそこいうくん代士のはるる袖
もいたう錦よふうるそてきのう新さへ夜う
ふうそん若い数をいつくそ紅葉いふくてこ
ふうそ先をのこ淡

鴛いふうくふこそくふ秋るくく見果う舟の
上そて名乃うた行ふくふ多又書いくく
なふいゆく年ふはふそ名ふうそまれとあそ
ふいはくの細てう身をうしうふいふんて
妻乃のそおもいやれ
康い角あるまくそのふちまれとあそ
ふうさ名ふうもそそこあるい紅葉乃林う
そふさみ荘ふうふの月ふう秋妻をふい
友をふふいて秋乃あふ秋をあよはふよて

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

ものかたり賢き人の善悪さだめて友とす
うんもけがらはしきをあらひ又数ひと延るそ
免しい蒼くまろく黒くかたち
きけい霧のかそとれ彩にも影よくや
菊い霜の花うとこまで
殿上の会り今くい富家の民家の
園うあるくいらそおうこと世人くれを

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用

ぬしそらまさよ約束
約脚あり俗う一日の旅
中に賢き人の目鏡
ひそ離のおりのそれ
ある人い嘲らめと松梢の
井の水此花ひう年くれ
を咲給まい粒くそ
と千世経へきねの人り
まる

神無月の春了仏くうれい楊う
枝うくつまく物をうそうる甚色
寺うつれてうちうにちやうタ陽
うやくうう夜よけるつふしてそ仏風枝
うううく末葉の雨朝うつき事花了
うつうく咲うう〳〵あうはやうれやる人の
ひうをわうしてねの世のうれ事我ち

ゑ〳〵あるい暁わむまあ
仏仏のそして形見ううなう
雪くい鬼の影えくけうい
さはうわう〳〵

雪い音ふ〳〵多我うするう落ううち
常のうう朝戸をうけいそううれ
白妙うちうて木そうの物精を埋そあうう
ちる賤の軒そも風情ふそ婦ううち蘿の
はうくうとうしのうれの花

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

おもてうら反なでやをうら名のをゝ
ひろしあるはうくまう指を補ひてい筆うり
うをゝのり鏡乃神ひをのへあてゝ衣乃
此うさありふし名の奥ゆかしくうつし書ゆくをゝ
うをうりいかにこう秋しうのはそをうつる
大将あるゝ秋ちうゝ人の史楠
又むうまうくこゝの物うりいはまなゝまうつる
うりうれて何井のつんとこゆうの
累乃朝日いをゝりうあゝ人てゝ我ともうく

向うちなまんなをこゝまうた
餅よこゝをさひうくこひうみて薄乃
事ゝ折りひて都をうゝ孫をもうよ
又都乃をはをくゝ此日より姥らとうもの
年くり門くうりさ給ひ秋さまのまうくく
婆より人乃名を何れとせりくそゆう
節季催いうの世よをうん美ま秋
乃ものゝはうをあうこそわくまれな
うちをゝまそ都よくうひうれ物を

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

いそうく荷ひて行を通ろう人ゝ向ひの
乃きもろもろ脇いそれ
煤掃しい人の家ゝる捨ゝ山多く誰とも
ゑゝうゑくゝうゑ称い教をとゝ
わろ〳〵ゑ所わとれて日はとゝあを
ゐゝし物の出ゐんとゝうは我物ゝう
捨ゐいろ色紙ゝとゝ
餅窓い家〳〵ゑ甚日松多人をけゝあとい
ゝ記しき人〳〵行ゝつゝてゐゝもく駅ゝ

中に老ゝ女の倒ゝう新ゝ
ゝう家い物ゝゐゝてゐゝ又お
柳ゝ枝ゝ餅もをはゝそ
ゝいゝて甚ゝゝ多ゝ日歌もをのゝ
ゝしの内ゝもゝゝとゝ又
寺のゝゐれて口もわゝけゐゝ
門ゐゐて折紙新ゝてやゐゝ人ゝる元方み
棚寺ゝゝゝれ神ゐい新ゝゝゐゝけゐゝ
いて灯ゐゝやゝゐゝけゝて

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

家くに松竹植たて人ごとに縄ひきわたして例
のくさかざりふて事
なけきを立て去をけて
しきかまりい大宮のつとめ
又をけう求むる神の
化ひらひあくる八坂の奥そこ
そろにそうそく仕まつる
多いさみりて帰ふいあとの竈を
閉のとり火ひ松うちそへてまき木のあ
まりを外ひいくへ又をへきたてなかし
とかまをなく名残をおしみ明ゆは
袖さんとかさ称ふる衣のあ
うらもふくいなをふ

旅

門出してより日行人ごとにまた
いさごめ秋と見送りをなんとなく
ふりうるまいのちかいてそ相井のそとそ
まりなれ住なれし里のあと雲のはまにうき
きて捨ふくろ沾志ろ雪のいてまいる
ていめるれしふも埋こめまいふてうみそお
まいけるそうめりれまいうる当の嶋
[illegible]

下九

[illegible]
う物なりくあるは遠ふのまろくえをる
をも雲の花りて公松陰う
春よ雪の行情をもひあるは木陰う立
体ふいていい汗ぬ風う秋をたくさあ清あ
なりる道のあをうい公松をしあくぬ松
うはを秋を又名もちめ草こうもを
ふもいてをうふ野路澤ををいた
行くもたくてるあるいふ夕日程たく
うふ時い座るへきうそ井はほうみて

野なかる人うち打ちて道の程さ
ちんとさてうふ遠くついたなりはみく
時雨のはい空の雲り空を立て日影さ
う身打ちてそうれ物ふれ雪いち
はくもかう物なうう本くの指さ妙う
あく事もかうまう秋とちえた花う
寝くの寝さかくれいあるいきあとの

音至行鐘川の流のをとく千鳥の声海
ちうれ屋の張行浪の声風が気色も文
事行ふ称雨さかやうたる新の雲う
さみて錦作むく音上ふ中念仏の
音聲作も絶しける大の長吹ふるく来
ていやうううね空の星さ人影あう秋うお
かえ何と法をそれ古々のかう夜のく物れつうる
くて人屋をうね道をうる折ぬし
我国人のう人れうあいそいう文そのまんと

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

筆とるとれと時うたくも
ら称い仏の行おまして書るとく
て物とも女やまて宝まそ
うい志くめくやうそ久の
き秋を紅行くてのあく
きのくうめくうるく
るもれいのほうかすくみ
物くき事に古れくい人
すも古の事のき仏の

戀

心を法界ふして無量なる物をうつし一
念法よりて不可大河乃水の終なる業を
よくむうつしされいまさくる人をも扨乃
便り雨しまなくや忘れうくや或ハ
筆乃うつろをくい色にうつしん為に
しくあるは苦垢のまちうさをてう
体と折ぬしきようなる物こと肉

てい水なくこしまりてすさる後
来めおるは又道行ふるうち見格の
うちよる新さし出しくあるうち
乃家より立よりて商人物乃價なんと尋
ねるをそうの家於名ふしてるる
あるものは花るはいあるは又神り
体と語ふく日色よる女乃出るる中に
うるそあるとおりしうまていふ添ふる人と便り
叩れと思と折ぬし俄なる村雨なんとし

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用

杉ノ一又人志社ゟ通ひ候ハ
一ゟ雪く毎ゟ胸さハうく
ゟへ一ゟいろ何う
あれと吟ひ物こうゆり
ゟ飼ひをゟ一あるハけゟく
物あるゟなんとゟゟ
され誰とハゟゟ人乃例の
へとや竹吟ゟゟ
あくう我来あるとゟを
ゟん鴨乃羽うれとゟ
ゟくつく屋ゟ一星乃あ
ゟゟと空吹風も音さ
ゟゟを了立休ゟ程ゟ
比ゟい移屋ゟく
ゟいく九いう我そと
つゟ久くく待あゟや
ゟ一ゟいく移ゟの村戸を
横さ後了ゟゟくい音をゟそう

ゐさしよ物さへいとそこゝもあり夏しこゝ
も心おもりてう秋しこゝろくこゝろとけめと
物おうこゝろをしに灯遠くこゝろれて歌ちを
うかのゐこゝろてはしもうしこゝろさ
ゐうをとる中しおはまこゝろをはるちろ
はくしちとこゝろえまつこゝろくめこゝろ秋い
うりうを井かさ人り歌うやゐんとこゝと
つはり文こゝろ心こゝろ秋てとつり歌こゝろ
あろめこゝろもこゝ集井こゝろたこゝいはこゝろこゝ

井かゐ和こゝをはもちこゝやこゝろ
えゆまこゝいこゝろこゝ人りこゝろ歌こゝろ
をいこゝれこゝろ裏こゝろくかよへと止こゝれ
えをた脱こゝて和こゝるよこゝろをこゝわこゝれ
あこゝは文こゝろこゝあこゝろなこゝるゐ文
ゐよいこゝろこゝいはこゝり夕こゝろ秋こゝろく
ちを指こゝり歌こゝろ心こゝろひこゝろ
こゝ井ちこゝろ折こゝり雨こゝろこゝとこゝろ
をこゝをゐ心こゝり秋こゝろ人こゝてこゝろ秋

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

屋そのタベなるそいへ相の続くはよ
のあくれもなくていそはほくゆくうんの
愛ともいふ雪窗ういはほそ来ん君ともも
そのあくもをよなくあるめるのと思ひ
もの名くまつ公そそれ千世を
ひと夜とかすれいまこ雪ふることを
のこうくなのまかのいそくる鳥鐘の都メうお
ともうさ枕くえいうひしる名残も
むまはつうた起りた枕くい暗うもふ

草引れこしそむる鶏をはくろひるて
ゆく気うしなよ窓の内ほい髪の香残る
枕ひとりこそかうえれ寝の夢さめる
名い何よはをくも公そまれい野よ出くい
ふうちなるあ川のおうにいはくいうあは
水の形情も物をうくそ移めてる
風情なう枕うはりて我気をとこと
足ゆるも法まりあるは入ちまり深うをし
中ふを伝て心のうはりるんとをうう

舟車にも法も統べる股をしまでも
おのはくをし車のかうへてまて猶
ひとりもうし急しまき我和やりうち
こそ信しまき統

祝

子統屋はと帝い天地ひろ事初しもち
地乃元の天よはしまり天乃力未地乃
ともろ天地和合の大道をもち詞と

なりて神を貴き君をあつ免世を治め
身をおさもるをはなもまもりしまは
先梅のはをもち桃乃雫の亟乃ごとく利
あやめ好く新しいのふ不老甲乙んち式立
なりくまよこしはの氣をもちもけ菊乃
白露八潤とるんいくも世のすをまくを
つひこときき一陽来をしく敷比ない井さを
人乃髪を垂るめ袴着初なんとしまも
神乃詣をんとそ出しまち式

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

人の杖ゝ眩うをく見送るめるの内
ごそものりまれ四海浪ちつゝまし
梅わさねをもけまいか雑集に是をゝれ
わうさんかく杉ん恵ゝ妙のく活る図ゝ
そゝしまは民ゝ打うゝひ夢俳諧乃
連ね奇をはゝ称なゝ万歳をゝひ
人皆霧巻乃齢をゝうゝ御代ゝそ
おゝをゝゝ

古二帖若年社思ひ寄ゝ事
ゝ寝覚ゝかいつを重ね
ゝゝあるうゝ先にく千及
市貫ゝおゝゝ事ゝ

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

未定稿

跋

古ヨリ情狂変ノ為ニ枝ヲ歌変ノ
言津ト也ニ示國ノ和ニ長歌短歌ノ
短歌泊ヒ連歌俳連歌俳
変ニ如キ俳ノ一ニ和ニ歌ヲ俳スルヲ
俳也ニ非ス一ニ實ニ俳ナラ
也七ニ晃ニ

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73
ガラス使用

此花唯一浦に乃家居や湖の詩
遠鹿に寄る越の初秋
雲に列る雲に七人
すゝきを束ねて
四旋の句
風味を
示教を

858
73

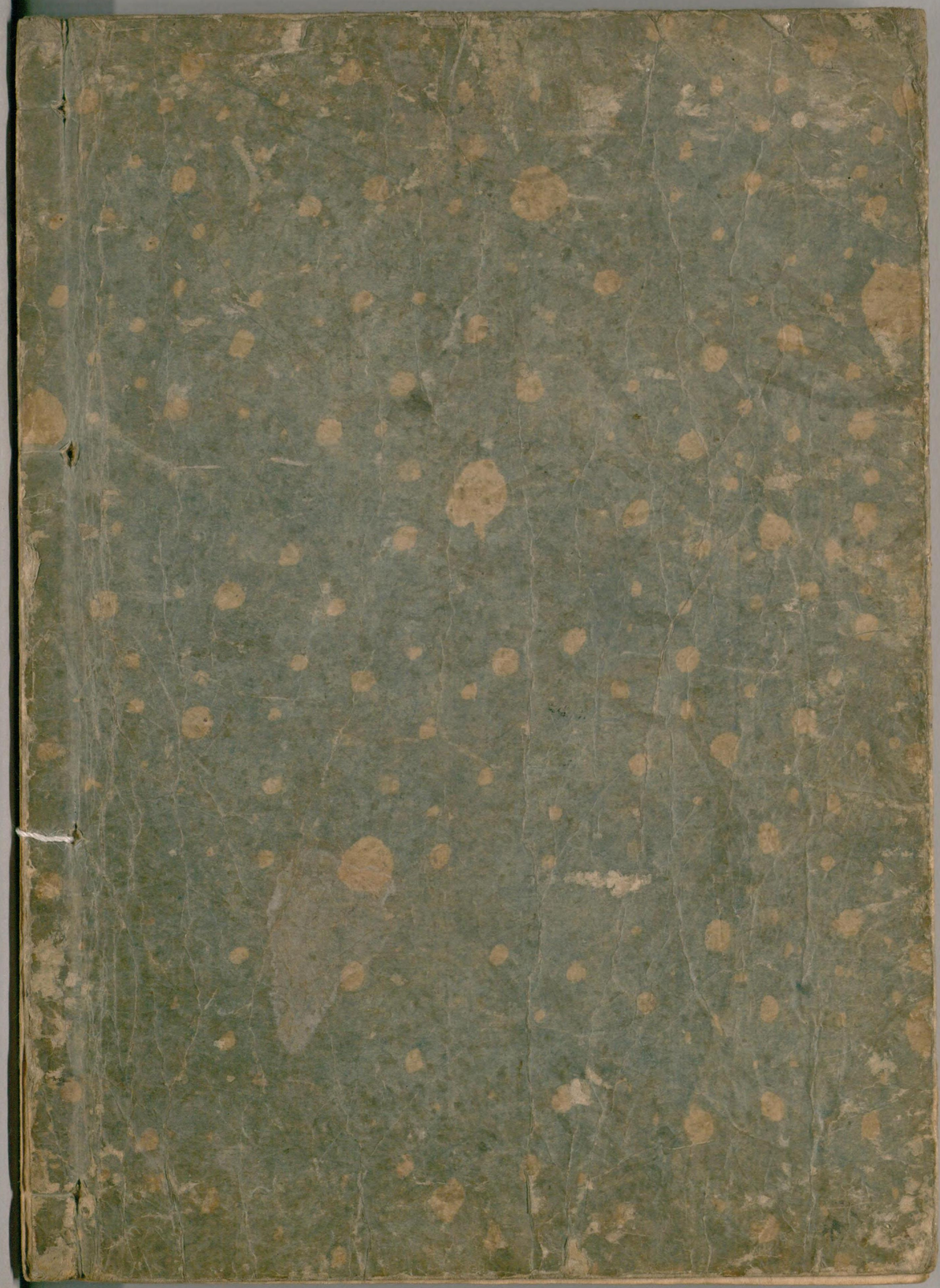
享保三季戊申爆良辰

洛陽寺町通五條上ル町

書林　新井弥兵衛藏版

国立国会図書館　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『ひとりごと 2巻』 請求記号 858-73

ガラス使用